

Il poeta 詩人

夜のカフェ 友だちと
オンナやクルマのことを話してた
「喜びと苦しみだよな。」なんて僕らは言ってたんだ
そのとき彼は泣いていた
そして君のことを話してた

田舎に踊りに行ったら
僕らみんな躍起になった
かわいい子と踊ろうと
そのとき彼は星を数えてため息ついて
そして君のことを話してた

トランプで彼はいつも一番強かった
「この辺りのボス」なんて呼ばれてた
その彼がある晩スコポーネで
1点取られてしまったんだ
君のことを話してて

そしてとうとうある夜
彼は自分の命を絶ったんだ
精神の大混乱で
なんと残念なことだろう
だって彼は本当に特別だったんだ
とくに君のことを話すとき

そして今、人々は言ってるんだ
彼は愛を語れる詩人だったと
たとえ彼はもう死んでしまっていて
もう二度と君のことを話せなくても

Estate 夏

夏

お前は失った口づけのように熱い
お前は私の心が消したがつている過去のある愛で溢れてる
夏が憎い
私たちを温めた太陽
素晴らしい夕焼けを描いた太陽
その太陽が今は激しい怒りで燃えている

冬は再び訪れて

たくさんの薔薇の花びらを散らすだろう
雪は全てを覆うだろう
そして私は少しばかりの安らぎを手に入れるかもしれない

夏が憎い

花々を香らせる夏が
私たちの愛を生んで、そのあとに私に死の苦しみを味わわせる夏が

冬は再び訪れて

薔薇の花びらを散らすだろう
雪は全てを覆うだろう
そして私は少しばかりの安らぎを手に入れるかもしれない

夏が憎い

夏

Parlami d'amore Mariù マリウ愛の言葉を

今宵 君はなんて美しいんだマリウ
青い瞳に輝く星の笑み
たとえ明日の運命は不吉であろうとも
今日、僕は君のそばにいる
嘆くことなんかない
明日のことなど考えるのはよそう

愛の言葉を聞かせておくれマリウ
君は僕の人生すべてだ
青い瞳は輝き
夢の炎はきらめく
これは幻ではないと言っておくれ
君は丸ごと僕のものだと言っておくれ
ここに、君の心の上にいれば僕は苦しくない
さあ愛の言葉を聞かせておくれマリウ

君は人を惑わす美しい人魚だってこと、僕は知っている
君の青い瞳を見たら誰だって我を忘れる
でもいいんだ笑われても
たとえ深海で迷おうとも君と一緒になら
そう 君と一緒になら

愛を語っておくれマリウ
君は僕の人生すべてだ
青い瞳は輝き
夢の炎はきらめく
幻ではないと言っておくれ
君は丸ごと僕のものだと言っておくれ
ここに、君の心の上にいれば僕は苦しくない
さあ愛を語っておくれマリウ

Ah che sarà, che sarà いったいなんだろう

いったいなんだろう
小部屋で吐息まじりに言っていることは
句と節で囁いていることは
暗闇で企んでいることは
頭と言葉の中でぐるぐる回るものは
行進の中で蠟燭に灯をともしものは
正門の下で大声で話し、市場で叫び声を上げるものは
自然の中に、美しさの中に確かにあるものは
それは理由のないもの ずっとないままのもの
それはなす術のないもの ずっとないままのもの
はかることのできないもの

いったいなんだろう
この恋人たちの思想の中に住むものは
詩人が狂気を抑えきれずに歌うものは
酔っ払った預言者が罵るものは
手足を失った人々の道のりに、絶望した人々の空想の中にあるものは
娼婦の「もっともっと」の中に、悪党の情けない企ての中にあるものは
いったいなんだろう
それはつつましさのないもの ずっとないままのもの
それは罰せられないもの ずっとないままのもの
理性のないもの

いったいなんだろう
どんな警めがあろうとも避けられないものは
全ての哄笑が挑むものは
そして全ての鐘は歌うだろう
そして全ての子どもたちはともに捧げるだろう
そして全ての子どもたちはともに清めるだろう
そして私たちの運命は出会うだろう
遠くから地獄を眺めている神さえも祝福せねばならないだろう
それは掟のないもの ずっとないままのもの
恥じることのないもの ずっとないままのもの
偏見のないもの

Vedrai, Vedrai ヴェドライ ヴェドライ (そのうち分かるよ)

夜うちに帰ってきてても話す気もしない
そんな優しい目で見ないでくれ
まるで僕が悲しい気持ちを抱えて帰ってきた子どもみたいに
いつの日か君が思い描いていた日々はこんなじゃないってこと僕は分かってる
そのうち分かるよ
変わるから
明日じゃないかもしれない
でもいつの日かきっと変わるから
そのうち分かるよ
僕だってまだ終わってないんだ
どう言えばいいかわからない
いつになるか分からない
でもいつの日か変わるから
僕のことをすべて受け入れてくれる優しい君を見るよりも
僕に幻滅して泣いている君を見る方がいい
君のこと、そして君にもうなにもあげられない僕のことを思うと失望するんだ
そのうち分かるよ
変わるから
明日じゃないかもしれない
でもいつの日かきっと変わるから
そのうち分かるよ
僕だってまだ終わってないんだ
どう言えばいいかわからない
いつになるか分からない
でもいつの日か変わるから

Almeno tu nell'universo 宇宙の中にあなただけ

人って変よね
嫌いあつたかと思ったら愛し合ってる
突然考えを変えるし
本当のこと言ったかと思えば嘘をつく
軽々しく
なんでもないことみたいに
人ってどうかしてるわよね
もしかしたら、あまりにも満ち足りていないのかも
何も考えずに世の中に倣っちゃう
世の中が変わればあの人たちも変わるの
いつだって
ばかみたいに

あなた、あなたは違うわ
宇宙の中であなただけは
あなたは決して私の周りを回らない恒星(ほし)
私だけのために輝く太陽
心の中に輝くダイヤモンドのよう

あなた、あなたは違うわ
宇宙の中であなただけは
あなたはきっと変わらない
ずっと今のまま偽りのないあなたでいるって言って
そして私のことをもっともっと好きになるって言って

人って孤独よね
なんとか寂しさを紛らわそうとしてる
私にあれこれ考えさせないで
なんでもないこと憶測して不安になるから

あなた、あなたは違うわ
宇宙の中であなただけは
あなたは決して私の周りを回らない恒星(ほし)
私だけのために輝く太陽
心の中に輝くダイヤモンドのよう

あなた、あなたは違うわ
宇宙の中であなただけは
あなたはきっと変わらない
ずっと今のまま偽りのないあなたでいるって言って
そして私のことをもっともっと好きになるって言って

Sabato italiano イタリアの土曜日

臭い中庭で猫がまた鳴き始めた
気分は冬の土曜日
花祭りの話題でラジオが僕を突き刺す
インターフォンで天使が言う「さあ、下りて来て。」
道では、幸運なことにみんなまだ生きている
星占いによると僕はこれから運気が上がるらしい
愉快に走らせよう もうすぐ真夜中だ
ご機嫌な雰囲気 星も灯ってる

このなんでもない土曜日
イタリアの土曜日
最悪は過ぎ去ったようだ
夜は僕らを遠くへ連れてってくれる飛行船だ

こうして僕らはフェリーニのローマを冒険する
週末を綱渡り
変わらない絵の上に、そして言葉と思いの中に時代錯誤の昔の音楽が流れる

いちばんしあわせな瞬間にも潜んでるメランコリー
仲間の彼女は 計り知れない深い海
このダイナマイトみたいな先が見えないラブロマンス
それは僕を胃炎さえも平気にする

このなんでもない土曜日
イタリアの土曜日
最悪は過ぎ去ったようだ
夜は僕らを遠くへ連れてってくれる飛行船

さあ今度は惑星の夢の中を飛行しよう
ウイスキーがまわり、僕は文学的になる
- どうして医者に行かないの？
- どうして行くんだよ？ 酒もタバコもやめたくないんだ！

このなんでもない土曜日
イタリアの土曜日
最悪は過ぎ去ったようだ
夜は僕らを遠くへ連れてってくれる飛行船
そしてこのなんでもない土曜日
イタリアの土曜日
最悪は過ぎ去ったようだ
夜は僕らの手をとって連れてってくれる変数だ

Senza fine 終わりになく

終わりになく
君は僕たちの人生を引っ張っていく
夢を見たり思い出したりする少しの間もなしに
一緒に暮らしたから
終わりになく
君は終わらない一瞬
君には昨日もないし明日もない
これからはなにもかも君の手の中に
大きな手
終わりのない手

月なんてどうでもいい
星なんてどうでもいい
君は僕にとって月でもあるし星でもある
君は僕にとって太陽でもあれば空でもある
君は僕のすべて
君は僕のほしいもの全て